

宮城の下水処理場、復旧難航

汚水放流 悪臭に悲鳴

東日本大震災の巨大津波で破壊された宮城県の下処理場の復旧が難航している。県内7下水処理場のうち3カ所が深刻な被害を受け、完全復旧には2年かかる見込み。今は応急処置として汚水に塩素を混ぜて海や川へ放流し、衛生面の問題はないとされるが、強い臭気が残るばかりか生態系への影響も懸念され、被災住民らは生活排水を減らす対策に乗り出した。

住民、排水減へ努力



「においがひどい。夏になったらもっと大変なことになるのでは」。排水口近くに住む名取市の男性（64）が顔をしかめる。この排水口からは仮設の沈殿池で塩素を混ぜただけの下水が排出されている。相談が寄せられた市の担当者は「排出を止めればマンホールから汚水があふれかねない。何とか理解してほしい」。

県によると、県内約60万人の下水を処理する県南浄化センター（岩沼市）、仙塩浄化センター（多賀城市）、石巻東部浄化センター（石巻市）の3カ所が津波に襲われ、施設やくみ上げパイプが破壊された。生活排水は従来の微生物による浄化処理もできなくなり、沈殿池で汚泥を除いた汚水に塩素を混ぜる処理だけで排出している。

この場合、下水処理場の微生物処理で浄化されるはずの炭水化物や油などの有機物が腐敗する。北海道大の船水尚行教授（衛生工学）は「病原性のウイルスや細菌は消毒されている」と衛生面の問題はないと説明するが、排水口周辺では鼻につく臭気が漂う。

住民も下水を減らす努力

壊滅的な打撃を受けた下水浄化センター（3日、宮城県岩沼市）

力をつける。名取市の会社員、八田健朗さん（42）は震災の数日後、知人から「下水があふれそうになっている」と聞き、生活排水の削減を呼びかけるビラを約600枚作り、町内会などに配った。自身も毎朝の洗顔や歯磨きは庭先で済ませ、トイレトーパーは流さずゴミ袋へ。「下水があふれたら困る。もう慣れました」

今のところ市内で下水が大量にあふれる事態には至らず、市下水道課の佐々木雅章課長は「市民が節水を続けてくれていておかげ」と話す。環境面の影響も残る。宮城県漁業協同組合（石巻市）の担当者は「塩素は養殖のワカメやノリの生育に悪影響を及ぼす恐れがある」と指摘する。加えて「下水が海に流れ」と話している。

な風評被害も起きかねない」と懸念を示したうえで「きれいな海を早く取り戻してほしい」と話す。微生物による浄化処理には特注の機械が必要で、完全復旧には2年近くかかる見通し。県下水道課は「海の生態系への影響も心配されるので、できるだけ早く震災前の状態に戻したい」（同課）と話している。